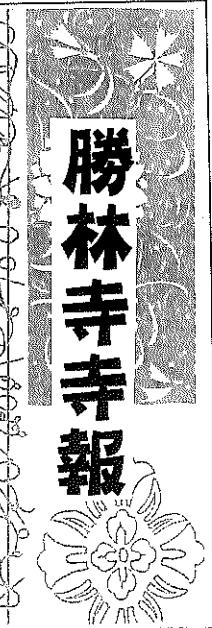


# 勝林寺寺報

## 如衆水へ海一味



今年も京都の大谷本廟に分骨納骨を終え、みなさんと一緒に金沢まで研修旅行に行ってきました。勝林寺での納骨研修旅行がいつ始まつたのか、はつきりとした記録が残っていないのですが、前坊守が体調を崩し、私が京都から寺に帰ってきてその葬儀を終えた次の年から二十五年間は、欠かすことなく一泊二日で納骨研修旅行にバスで出かけています。

大谷本廟の第一無量寿堂が一九六八年（昭和四十三年）に造営され半世紀、勝林寺の過去帳に記載されている昭和四十二年以降の皆様のお骨はほぼすべて納骨されています。（ただし昭和五十年ころまでは土葬だったためか、遺髪が収められていました。）この無量寿堂造営は戦後日本の社会事情が激変する中、親鸞聖人の七〇〇回大遠忌法要を起点として、新しい時代に対応した宗門の具体的事業として進められたものと考えられます。同時に私たちは“御同朋・御同行”という親鸞聖人の人間観を基本として今日まで歩んできました。

人は一人ひとり別々の人間として産まれ、名を持ち、家を持ち、地位を築き、例えば大空から降り注ぐ雨粒が、一粒一粒ばらばらに落ちてくるようにそれぞれの人生を個々別々に生きていきます。その間個々の雨粒は、その名を競い合い、憎しみあい、傷つけ合い、格差を生み出し、他を認めようとはしません。そのことを嘆

き悲しまれた阿弥陀様はすべての命が南無阿弥陀仏と称える中で無量の寿（いのち）の中に帰つていくことを示されました。それは雨粒が地に落ちた時、一粒一粒が寄り添つて小川となり、小川が寄り添つて大きな川となり、大きな川は最後には必ず大海に注ぎ込んで、海の塩味、一つになるようなものであると親鸞聖人はお正信偈にうたわれています。五十年前の無量寿堂の造営は、これから日本がますます個別化の意識が進み、核家族化が進み、人と人との命つながりが見えにくくなつていて、お念仏をともに喜んだ先ゆく人たちは、みな親鸞聖人のお墓に一つに入れていただけを見るとどけていくことで、今生きている私も、一つの命として生かそうとする阿弥陀の願いを実感させていくための実践的活動であったと思われます。

今回は私の父であり、勝林寺の前住職西池哲

俊のお骨も十九人のご門徒のお骨とともに無事納めさせていただきました。たくさんのご家族が一緒に集まつていただき、総勢五十九人での納骨で、西池家は次男の入海（イルミ）がおじいちゃんのお骨を納めてくれました。

これも五十年前に、前々住職が勝林寺の境内の地下に納骨スペースのある“無量寿”を造営してくれています。近年ますます社会事情が変化し、個々のお墓を持つないことも多くなつてきています。そんな時どうか、ともに生きられた先の命の恩を粗末に海に投げ捨てるようなことのないよう、一度勝林寺にご相談ください。

（文責 住職）

六月一十二日 永楽館全国子ども落語大会

お客様の数は、やうに100名を超ました。席が足りなくて、縁や後ろで立ち見も出来ました。うちのご門徒さんもたくさん来てくださいました。子どもたちの落語は、それは見事でした。堂々としたものでした。阿弥陀さまの笑い声が聞こえたような気がしました。

六月十五日 葬儀

出石川原町 龍井博文様 六十歳

### 永代経法要の「」案内

永代にわたってお経が読まれ、み教えが代々引き継がれていくことを願つてお勤めする「永代経」です。みなさん、お参りください。

三 日 (火) 斎藤 保宅 五〇回忌

四 日 (水) 伊藤昭一宅 七回忌

七 日 (土) 出石組連研 役員会

八 日 (日) 勝林寺 永代経

九 日 (月) 勝林寺 永代経

七月九日 (月)

午前一〇時より

午後七時三〇分より

九 日 (月) 勝林寺 永代経

一〇日 (火) 島根 瑞泉寺 一七・七回忌

一一日 (水) 兵庫教区 教区会

一二日 (木) 古田博己宅 一周忌

一四日 (土) 古田博己宅 一周忌

一五日 (日) 清水正和宅 一周忌

一六日 (月) 出石組仏事報告総会 (乗専寺)



### 七月 勝林寺 予定

三 日 (火) 斎藤 保宅 五〇回忌

四 日 (水) 伊藤昭一宅 七回忌

七 日 (土) 出石組連研 役員会

八 日 (日) 勝林寺 永代経

九 日 (月) 勝林寺 永代経

七月九日 (月)

午前一〇時より

午後七時三〇分より

九 日 (月) 勝林寺 永代経

一〇日 (火) 島根 瑞泉寺 一七・七回忌

一一日 (水) 兵庫教区 教区会

一二日 (木) 古田博己宅 一周忌

一四日 (土) 古田博己宅 一周忌

一五日 (日) 清水正和宅 一周忌

一六日 (月) 出石組仏事報告総会 (乗専寺)

二一日 (土) 田中幸男宅 初盆

二二日 (日) 出石組 同朋講座

二三日 (日) 出石組 連研 研修旅行

二六日 (木) みのりを聞く会

二八日 (土) 立脇 晃宅 一周忌

二九日 (日) 山田正規宅 三回忌

三〇日 (月) 龍井祐子宅 忌明初盆法要

珍しく(?)二日間とも好天に恵まれ、暑すぎ涼しすぎず、京都、山代温泉、金沢を旅してきました。軽妙で丁寧な案内係の方にすっかり心を奪われ、九谷焼を買いました。お饅頭も買いました。きんづばも買いました。お宿の温泉がとてもよくて、二度も温泉につかり、身も心も輝きました。金沢の海の幸をお腹と買い物袋にいっぱい入れて、美しい庭や街並みを目に焼き付けて元気に帰つてきました。さあ、これでまた頑張れます！



(敬称略)

## 共に生きるという考え方

近代以来、人間は科学の生成と、それによる技術文明を進展させることにより、自然を征服し、社会を改造し、人間生活を豊かに向上させできました。しかしながら、そこではつねに、自然も社会も自分自身についてさえ、その存在の構造を、すべて二次元的な対立の関係において捉え、それを機械論的に解釈してきました。たとえば、生物学においては、ダーウィンがあらゆる生物は、つねに他の種族と対立し、それと生存競争をすることによって進化してきたといい、また経済学においては、マルクスが、社会の構造は、すべてが資本家と労働者との対立関係にあって、その階級闘争によってこそ、社会はよく改造され、進歩するといったようなものです。

そこではいざれにおいても、その構造をとらえるのに、このような異質なるものの対立と抗争の構図を見て取り、それを進化、発展の契機として、高く評価するというものがありました。しかしながら、このよくな、すべてを二元論的な対立の関係ととらえ、その抗争に勝利したものは、榮光が輝くという発想のところでは、それとは逆の、異質なものの相互の連帶、共生という考え方は、まつたく生まれることはありませんでした。実は、ここにこそ、過去の世紀において、戦争が繰り返された原因があり、そしてまた、今日のような環境破壊が進んできた、最大の原因があるのです。私たちは、自然も社会も人間自身についても、その存在構造は、そういう対立関係と共に、その反面においては、自他一如なる共生の関係においてこそ、よく成立し発展してきたということを、決して見落としてはならないと思います。

アジアの文明では、人間自身についても社会

も自然も、すべてを一元論的に、自他一如として捉えてきました。そのことは、大乗仏教の根本原理に明瞭であって、仏教では、自己に対する他者としての、あらゆる生きもの、さらには草や木、または石や土に至るまでに生命を発見し、それが人間の生命と通じ、連帶していることを語り、そこに私たちの生命が生かされていることを教えております。このような自他一如なる発想に立つところにこそ、その必然として、はじめて国家や民族間の対立軸を超える、新しい道が開かれ、また人間と自然の調和にもとづく、新しい文明が生まれてくるのではないでしょか。

これからの一世纪が、世界人類にとって、ほんとうに平和であり、幸福であるためには、何よりも世界の人々が、このような自他一如なる共生の論理を学び、その道をたずねていかなればならないと思ひます。

(信楽峻磨遺稿法語集より引用)



2018.6.16~17 納骨研修旅行記念写真

## 法語カレンダー七月 雜毒の善ともて かの浄土に向むかふ これ必ず不可なり

法語カレンダー七月

どすん

今年も、多くの皆様のおかげで一九名の物故者の方々を、親鸞聖人のご廟に納骨させていただきました。

ここに、ほつとした表情で写る参加者の皆さんのお顔がちゃんとそろっておら

き、その数なんと五八名! (カメラマンを務めた入海が写っていないので、実際には五九名!) 参加者の皆さんのお顔がちゃんとそろっておら

れるかハラハラドキドキバタバタしたので、いつもなら入念に行う、写る前の最終チェックが不十分で、私は、カーデイガンの肩が片方ずり落ちたまま写ってしまいました(笑)

納骨される「家族」を見ていて、いつも感じることがあります。肉親を亡くされたことは、どれほど時間が経とうと、たいへん悲しくついにかわりありません。しかし、そのことを家族みんなでいたわり合い支え合いながら、今まで無事に務めあげられた安堵感のようなものを身に纏つておられるのです。そして、残された方たちが、亡くなつた方を中心にして、今まで以上に絆を深めておられる気がします。例えば、はるばる東京から足を運んでくださった息子さん、お父さんを支えながら、納骨だけでなく旅行まで参加してくださった息子さん、お母さん一人残されたお母さんやお父さんを励まして姉妹で、姉妹夫婦で、あるいは姉妹一家で参加してくれださったご家族などなど。死は、ご本人に

どうな善行・功德ではありません。「雜毒の善」がしていることは、淨土に回向して評価されるようないふべき行為」と言わなければ「雜毒の善」「虚偽の行」と言わなければならぬのです。私たちがしていることは、淨土に回向して評価されるようないふべき行為です。阿弥陀様は、一部の人を救い、そのほに往生することを、どのように考えればよいのでしょうか。答えは、阿弥陀様の大きな広いお心です。阿弥陀様は、一人の命を救い、そのほのかの人を救わないとはおつしいません。特定の人を先に救い、ほかの人は後回しにするといふことではありません。阿弥陀様の眼差しは、すべてのものが行っているすべての事柄は皆、救い方であります。だからこそ、すべての人を放つことです。だからこそ、常に寄りそい、必ず救うと願つてくださるのです。(月々のことばより)